

On the Diversity of the Scientific Realism Debate

オーガナイザ :

野内 玲 (信州大学)

提題者 :

大西 勇喜謙 (総合研究大学院大学)

森田 紘平 (京都大学)

Juha Saatsi (University of Leeds)

企画趣旨 :

科学的实在論論争は、1980年代に設定された対立枠組みを通して発展してきた。特徴的な例を挙げてみると、まず反实在論の悲観的帰納法という議論に依る形で、实在論側はその当初の主張を様々な仕方で制限した「選択的实在論」を提唱している (Cartwright 1983: Hacking 1983: Worrall 1989: Psillos 1999: Ladyman 1998, 2014: Chakravartty 1998)。また、反实在論側は、理論的对象の实在論的コミットメントの変化ではなく、科学者集団の能力に着目した「新たなタイプの帰納法」による反論を提示している (Stanford 2006)。一方で、反实在論の代表者であるファン・フラーセンが主意主義的認識論をとり、实在論と反实在論の違いはスタンスの違いとみなすなど、論争の対立軸であった理論的对象の肉眼による観察可能／不可能性という線引き自体が問題とならなくなってきた (van Fraassen 2002)。

实在論論争は科学哲学の主要かつ重要なトピックとして継続的に議論され、以上のように、どちらの陣営からも多様な論点が提唱されてきた。しかしながら、多くの論者を経て議論が再構成・最適化・個別化されていく過程で、そもそも何が問題になっていたのかが見えにくくなってしまっていることもありうる。

本 WS では、以上のような实在論論争の多様化した状況の中で、今後の实在論論争の方向性の模索や、掘り下げられてきた諸論点の意味付けを探索することをテーマとする。各提題者の講演内容の概要は以下である。

大西は発展しつつあるニューラルネット、ディープラーニング等の機械学習をテーマにする。同科学は構成的経験主義を支持するよう見えるものの、単に経験的データのテストに収まらない実態を有し、实在論を支持する証拠を提示しうることを指摘する。

森田は基礎的な物理学から現れる基礎的でない物理的な対象・対象の存在論的身分について紹介する。特に、基礎物理学的な対象の实在性を認めつつ基礎的ではない対象・構造の实在性を担保するためには、純粹に数学的な操作が必要となることから、多くの議論で前提となっているような重要な構造の实在性の抱える問題を明らかにする。

Juha は特殊科学 (生物学、神経科学、経済学など) と (基礎) 物理学との関係をテーマとする。従来、これらの科学は対比して論じられて来たが、何が基礎物理学に相当するのか、特殊科学と基礎物理学の関係、これらの科学における説明の役割といっ

た観点からすると、特殊科学に対してとる实在論者の態度は基礎物理学に対するそれとなんら変わるものではないことを指摘する。

使用言語：英語

本研究は **JSPS** 科研費「科学的实在論論争の歴史的パースペクティブ上での再検討」(代表：伊勢田哲治) 課題番号 **18H00604** の助成を受けたものです。